

三に、雪のくだけといへり。ほどろくふるうちきらし。たなざりあふあまざりいほへふる重也五百つぎて繼也。いやしきふる。とよくにのゆふ山ゆきといへり。雪也。ふじの雪は六月のもちにきえて、其よふると在歌。雪をほどろくにふりまげばといふ也。邊々云故人説也。かゝれる雪。後撰に二首也。ふゞきは雪をふくなりひかる万。

〔藏玉和詠集〕冬。六花。雪。

冬嵐にふかれてちるか六花の手折袖にも雪のかゝれば。

六花の事、委和歌新論に有俊房作、春に二梅、櫻、冬に則三冬、雪、秋に一菊、夏、卯花、雪ありといへども、夏雪の事、依爲凶事、六花には不入。

〔萬葉集雜一〕輕皇子宿于安騎野時、柿本朝臣人麻呂作歌。

八隅知之、吾大王中玉蜻夕去來者、三雪落阿騎乃大野爾略。

〔萬葉集冬雜歌〕大伴坂上郎女雪歌一首。

松影乃淺茅之上乃白雪乎、不令消將置、言者可聞奈吉。

〔源氏物語初音〕ことしはをとこたうかあり、うちより朱雀院にまいりて、つぎに此院にまいる。道の程とをくて、夜の明がたに成にけり、月のくもりなく、すみまさりて、うす雪少しふれる庭のえならぬに、殿上人などももの、上手多かるころほひにて、ふえの音もいとをもしろくふきたて、このおまへはことに心づかひしたり。

〔圓珠庵雜記〕雪をはだれとよめり。

萬葉十九、わがその、すも、の花か庭にちるはだれのいまだのこりたるかも。

〔夫木和歌抄十〕十一月きえやすき雪をうらみし心。

はだれ雪あだにもあらできえぬめり世にふることや物うかるらん。

主殿